取組・活動名	福祉体験スクール（高齢者体験）					
校種・学年	中学校・第３学年				教科等	総合的な学習の時間
カテゴリー	歴史・意義	アスリート	多様性	日本人	時間・学期等	３時間扱い・２学期
	国際感覚	ボランティア	伝統・文化	（その他）	準備等	講師の依頼 用具の借用

プログラムのねらい

少子高齢化の進む社会にあって、地域社会の中学生への期待は大きくなってきている。そこで、実際に高齢者体験という、お年寄りの不自由さを体験する活動を通して身をもって理解することで、高齢者の身になった考え方ができたり、社会で共生していけたりできるような生徒を育て、地域に貢献することをねらいとしている。

児童・生徒の実態

本校は昔ながらの田園地帯にあり、生徒は素直で子供らしい気質の者が多い。しかしながら近年は、宅地開発が進み、お年寄りと接する機会や体験が少ない。また、地域的にも核家族が多くなってきている。

プログラムと既存の学習との関わり

総合的な学習の時間の中で３年生は、福祉教育を大きなテーマにしている。１学期には、バリアフリーとユニバーサルデザインについて講師の方を招いて学んだ。また、東京 2020 オリンピック・パラリンピックの開催をふまえ、多様性を認め合い、共生社会の実現に向けた取組についても学んでいるところである。そこで、これらの学びが、今回の体験学習を通してより深まることを期待している。

指導計画・評価計画

【指導計画】

全体での開会、閉会行事は行わず、各クラス・体験ごとの活動とする。

活動内容、指導は講師が行い、担任は各クラスにつき、副担任は危険箇所の見守りを行う。

１　車椅子体験（体育館）講師４名＋担任＋副担任１名
　講師によるデモストレーションのあと２人１組で体験を行う。

【評価】

安全で丁寧な運転操作を身に付ける。感謝の心を育てる。

２　アイマスク体験（３－２教室と東階段２Ｆ～３Ｆ及び流し前廊下）
　講師３名＋副担任１名
　教室内で講義を受けてから実際に歩く体験をする。２人１組で行う。

【評価】

目の見えない不安な気持ちを理解する。安全安心な誘導の仕方を身に付ける。

３　高齢者疑似体験（２Ｆホールと西階段２Ｆ～３Ｆ）講師２名
　３人１組で装具の装着や老人体験をする。（手足の不自由さ、視野の狭さくなど）

【評価】

高齢者の不自由さを理解する。思いやりの心を育てる。

本時の学習指導

⑴　本時の目標

①高齢者の不自由さを実体験し、思いやりや気付きの心を育てる。

②具体的な支援の仕方を学ぶ。

⑵　展開

次の３つの活動を各１時間扱いで３クラスローテーションして行う。

①車椅子体験（体育館）

車椅子１５台・ホワイトボード１台・マット２枚・三角コーン１０本

・体育館に用具をセットし、体験コースを２人１組で車椅子体験と車椅子の操作を学習する。

②アイマスク体験（３－２教室、東階段２～３F、流し前廊下）

アイマスク２５個、三角コーン２本

・教室で講義を受け、机を障害物に見立てて教室内、廊下を歩いたり、階段の昇降を体験したりする。（２人１組）安全安心な誘導・先導の仕方を学ぶ。

③高齢者疑似体験（２Fホール、西階段２～３F、印刷物前廊下）

老人疑似体験用具１２セット、生徒用机１３個、三角コーン１本

・２Ｆホールで疑似体験について講義を受けてから３人１組で装具を着用して歩く体験を行う。

成果	おすすめポイント
○実際に高齢者体験をすることによって、お年寄りの不自由さについて体験活動を通して身をもって理解し、思いやりや助け合いの大切さ、相手の立場に立って考えることを学ぶことができた。高齢者と共生していくことの意義を知識だけでなく経験からも感じることができた。	○様々な疑似体験をすることで、高齢者の立場での体験ができるとともに、介助者の関わり方も学ぶことができること。
	“次代に語り継ぐ”ポイント
	○少子高齢化は自分たちの生活の身近な課題であり、様々な年齢層が共生するためには、相手の立場に立って考え、行動することが必要である。少しの思いやりを行動に変える一歩が地域への貢献につながる。